

協会活動状況

(特別の記事のないものはすべて植物園において)

●昭和五十一年二月十日(火) 編集委員会

出席者 石川(俊)、八木、辻井、野田 小川、山口。

主として、会誌十五号の編集方針を協議。おおむね次の事項について話合われる。

一、「湿原」特集を組み、広く道内各地の大小湿原を網羅する。全国自然保護連合北海道大会の巡検コースの一つになっている釧路湿原を重点的にとり上げるほか、サロベツ、ピアシリ、浮島など二十数カ所を選定する。

二、締切りは三月末日を予定し、全国大会前の六月下旬をメドに発行する。

三、会報は、できるだけ早い時期に発行する。

●二月十日(火) 常任理事会  
出席者 石川(俊)、八木、辻井、高畑 石川(治)、野田、小川。

議題 一、自然シリーズの刊行の件

昨年来の懸案であった札幌の自然シリーズは、札幌市の財政的な協力を得ることが困難な状況になったので、とりあえず協会単独で刊行する。早急に編集委員会の体制を整え、筆者、テ

ーマの選定にはいる。年三回程度を見込み、最初の一冊を八月の全国大会に間に合わせる。

二、要望書について

「環境保全に関する調査研究機関の設置に関する要望書」・および「恵庭岳滑行コース復元についての要望書」を早急に関係当局に提出する。また、全国自然保護連合大会の協力要請を釧路市長宛におこなう。

三、自然保護講座(仮称)開設について

会員および市民を対象にした「自然保護講座」(仮称)を開設してはどうかという提起がなされる。時期は六月の環境週間の頃を考え、できれば集中的に五、六回開講すれば効果的、というような意見が出る。詳細は次の理事会の席で提案して煮つめることにする。

四、都市問題特別委員会の活動について

会報での通知が遅れてしまい具体的な活動ができずにいるが、できるだけ早い時期に発会したい旨、委員長より提案がなされた。

●二月十四日(土) 第六十三回理事会

出席者 石川(俊)、辻井、高畑、石川(治)、小川、阿部、桑原、井手、山口、田中、高橋。

議題

一、自然シリーズの刊行に関して(辻井常任理事より)編集委員会で話合った内容を説明。刊行する線で作業を進めることで一致をみる。

二、「自然保護講座」の開設について

常任理事会で提起された経過を説明。開催を積極的に進めるべきとの意見が多く出される。運営委員会を組織してとり組むことが確認される。

三、都市問題特別委員会について

札幌を例にとっても様々な問題が各地で発生している現状を考慮し、活動を軌道に乗せるにはどうしたらよいか話合われる。

四、道の委託調査について

多方面にわたるスタッフのやりくりが困難であること、調査に全力で臨めばむしろ赤字を生じてしまう現状に鑑み、委託調査は返上し、協会のやれる範囲内で独自の調査を進めるべきだ、と常任理事より報告がなされた。

五、全国自然保護連合大会・釧路湿原巡検について(田中理事より)

釧路側のこれまでのとり組みと協会への協力要請がなされた。

六、要望書の件

常任理事会で話合われた二つの要望書に加えて、「円山の自動車道に関する要望書」も札幌市宛に提出してはどうかと原案が示され、もう少し具体的に表現をしたらうで提出することで一致した。

七、シンボルマークの公募について

かねてから会員間で希望の多かったシンボルマークの公募について提案される。次の会報でその旨広告を出し、広く会員から図案を募集するほか、雑誌、テレビなどを通じてPRしてはとの意見が出される。



は秀さんの大きな功績である。

秀さんはいつも僕たちの雑談と笑いの仲間に入らず、秀さん一流のふくみ笑いを浮かべて聞いている人物だから、たまに会っても「オッソ元気が『ウン』と首を振り、必ずニヤリとふくみ笑いをして目で物をいう表現だけは忘れなかった。その目とふくみ笑いは、ヒューマニストたる彼の暖かさを感じた。こんな交友が五十年も続いたが、むしろその他の交友もあった。それはお互いに文章を書いたからで、それをお互いが読み、お互いが知り合っていたからである。

去る一月二十六日、野の花のない冬のことゆえ、シプリペデュウムの鉢を持って秀さんの病床を見舞った。物いえぬ秀さんは両手を挙げて最大よろこびを現わし、僕の手を握ったが、意外に力はあった。

秀さんは紙片に「この花をスケッチしてくれ」と書いて僕に示した。僕は秀さんの著書「北の山」の複製版を出してサインを求めると、ベッドに起き上がって「五十年の岳父・坂本直行君」と書いてくれたので、僕は自著「山・原野、牧場」の再版本に「五十年の岳父・伊藤秀五郎君」とサインして渡すと、秀さんはそれを高く差上げてよろこんでくれた。その三日後、僕は色紙と絵の具を持って再び病床を訪れ、約束の花を描き、額に入れてやると、秀さんは再び前回より力のある握手をしてくれた。

「北の山」の初版は昭和十年で、僕が原野での苦しい生活の最中で、秀さんに

頼まれた装幀と挿画は、自分でも感心したものでないと思っていたが、昨年十月の全国の出版社の造本装幀コンクールで、出品数四〇八点中の、入賞作品二十八点中に入賞したのは望外のよろこびだったが、これも秀さんは手を挙げてよろこんでくれた。花のスケッチとこの入賞は、秀さんと僕との五十年の交友の幕切には当って、いちばん良い土産になったのではないかと心ひそかにそう思っ、長い間、手を握り合って別れを惜んだ。

北海道の山の上に彼の手で積み上げられたケルンは、山とともに残るだろうが最後の別れも、筆談というむごいことは秀さんにさせる気もしなかったの、いつものように目と目で語り合っ病床を去った。帰る道すがらもう十年生きて思いのまま北海道の自然を歌いあげての詩を残してもらいたかったと思つた。それは秀さん自身が積み上げたケルンに添える花、と考えたからであった。

(山岳画家)

### 北への先覚

高沢光雄

横兵で育った伊藤少年が、学問の場として北の大地に眼を向けたのは何故であったらうか。クラック精神、札幌農学校、フロンティアに憧れて大正十一年に北大に入学したのであるが、その理由は

少なからず従兄の大橋邦太郎にあって、近くの山によく連れられて歩き、その頃から自然に対する心が芽生えていた。

彼は、内村鑑三の弟子であったので札幌農学校の話をよくして、しきりと北大進学を推していた。横兵一中の校長は札幌農学校出身の木村繁四郎で、同窓の志賀重昂を学校に招いて講演を聞いたこともあったが、直接の動機は校長の勧めで北大を受験したことにある、と話されておられた。

北大に入学してからは板橋敬一、田口鎮雄、佐々木政吉、藤江永次らと山行をともにし、大鳥亮吉のクワウンナイ川湖行や、楨、有恒のアイガー東山稜初登攀に刺激されて北大に山岳部を創立し、自ら北千鳥アライト登頂、スキーによる石狩岳、幌尻岳などの初登攀。日高の沢を単身で湖行するなど、輝かしい記録を樹立した。また岩登りについては張碓の岩艇や八剣山で練習を重ね、慶応の早川種三、岡部長量から洞沢で岩登りの指導を受け、岳沢一枚岩尾根から積雪期の登攀を成しとげた。

それらの多くは名著「北の山」に見出すことができようが、「続・北の山」を著すことが念願で、請われて、*ガ*ぶやら新書から「北海道の山旅」を上梓し、その片鱗を見ることができた。目下、若溪堂で著書の出版が企画されていると聞くが、自らそのページを開くことなく逝かれたことは嘆かわしいことである。

後年になって日高山脈や大雪山に登られ、想いを新たにしておられた。北海道

自然保護協会「会誌」十二号に「大雪山登山史」を発表されたときに、今度は「日高山脈登山史」を手がけようと思気込んでおられた。しかし、いまはその玉稿にも接し得られなくなったことを思うと、まことに残念の窮みである。

(丸善株式会社札幌支店)

### 扉のむこうの山

一 原有徳

伊藤秀五郎氏は、科学者であり詩人には違いないが、登山家といえるだろうか？ 登山行為の伴わなかった晩年に対してはいえないであろうが、私は岳人という言葉をもって、坂本直行氏とともに、本道岳界の大先輩、二大双壁といいたい。岳人それぞれ世界観の違いはあるが、伊藤さんと坂本さんはまことに対蹠的な道を辿られたと、私はいつも思う。

坂本さんのことは、いざれ書く機会もあろう。伊藤さんは有形具体の山から、無限に高き山、つまり名著とされている「北の山」の主張どおり、その時代から社会の山へと転向された方といえる。現実の山は、じつは二十代に終わっているのであるが、これは理想を志向し永遠を求める対象の山が、伊藤さんの環境には無くなったとられよう。そのころの時代には、職業と山は両立し得なかつた。両立させたのは坂本さんくらいではなから

うか？ それだけに、伊藤さんの短かった現実の山の記録とその理念は、凝集され厳しくして深く、永遠に生きて伝わるのだと思う。

それはちょうど、現代美術の原点ともいえるマルセル・デュシャンに似通うものを、私は強く感じる。彼は二度とくり返しをしないことを信条に実作したが、後年、長期作品活動を絶つたまま死んだ。そうして主張を裏付けすることく、未発表作品が公開された。それは封塞した扉の隙間から、過去の作品群らしきものが見える大作であった。

伊藤さんには、ただの一度しかお逢いしなかった。そのとき、「知己とはどこにいるかわからぬのですね」といって下さったことが、いつまでもあたたかく私の心から離れなかった。山口 透さんや林 和夫さんからご容体をうかがったが、私はお見舞にはゆかなかった。あのとときの印象を大切にされたからである。亡くなられて、伊藤さんを思い、どれだけ吸取しているかと思うと、あの言葉が冷たい言葉になってかえって来た。それはあの狩場山の、伊藤さんの身心探るばかりの文章に融けこんだ私の山行の記憶よりも、さらにさらに、冷たく身うちを走るのである。

ことばよりも冷たき山に佇ち給う

九 糸

(金道美術協会・小樽山母会々員)

## 伊藤先生との山行から

辻井 達 一

伊藤先生の晩年の山行の幾つかにお供できたのは幸いだった。そのどれもが、楽しい思い出となって生きている。昭和四十三年におこなわれた自然保護協会の調査で幌尻岳へ、このときは石川、井手 両先生も一緒に、なかなかの大部隊だった。

その翌々年、つまり昭和四十五年の七月初めに、日高へまた行きたいというご希望だったので、仲間と相談して神威岳に決めた。これもごく短い山行だったが人数も少なく、山でも人に会わず、静かない旅だった。沢のキャンプ・サイトで派手なたき火を楽しんだのである。このときのことは秀岳荘発行の「山の素描」第二六号に先生が書いておられる。僕は山で自分の写真を撮ってもらったことがほとんどないんだよ、とおっしゃったので、じゃあ、これからは少し撮りましょうと申しあげて、それからはいせいせい撮ることにつとめた。

大体、先生は近頃には珍しくらしいのいってみれば怖い顔をしておられる。ただ、ユーモアは人一倍、解される方だし馬鹿話だって決しておきらいではない。だから、怖い顔をしておられても、面白がっていらっしやるのとはときどきごめか

みだの片類だのがピクピク動くので解かるのである。その先生が、カメラを向けると、とても照れたような顔をなさるのであった。

三年くらい前から、湿原に興味をもつようになつたよ、と伺った。やはり自然保護の仕事でサロベツ、それから日を改めてオホーツク沿岸へ行かれた。オホーツク沿岸ではついでにピヤシリへ登ったが、これはてっぺんに小さな湿原があるところだったから、小さな山にしても山と湿原を両方、楽しめたわけである。

まだ、もつとほかの湿原をみたいものだ、湿原の花の詩を書きたい、といっておられた。その一つはこの前の会誌に載せることができた。けれどももう、先生のお供をして湿原を歩く機会は永久に去ってしまったのである。(北大附属植物園)

## 伊藤秀五郎先生

儀 浩 三

伊藤秀五郎先生は自然保護教育を熱心に提唱され、そして実践された先生でした。

私をはじめ先生にお目にかかったのは、昭和四十三年、道林務部が「自然保護読本」の作成を企画したときのことです。当時は、このような試みは日本でもはじめてのことだったので、この仕事の一部に携わった私は、どうして良いかわか

らず、思いきって伊藤先生をお訪ねしたのです。私にとっての伊藤先生は雲の上におられる「北の山」の著者でしたが、先生は快よくお会いくださり、静かに、しかし情熱的に自然保護読本の企画に対するご助言をくださるとともに、自らその一部を執筆してくださいました。

ある日、先生は「古風かも知れないが僕の教育観があらわれている」とおっしゃって、「クラーク博士と札幌農学校」という本をくださいました。この二つの著書には、教育には知的訓練とともに精神的教育が必要なこと、健全な精神は優れた自然環境の中で形成されること、が美しい文章で記されています。

その後、道としては先生に自然環境保全審議会の委員をお願いしましたが、先生はしばしば病をおしりましたが、自然保護行政への指針をお示しくださいました。先生は声が不自由でおられたいへん重く審議会の空気を支配しました。さる二月十四日、審議会が開かれましたが先生にはご出席いただけなかったので、お見舞にあがるべく病院へ問い合わせましたところ、すでに面会謝絶とのことでした。

お見舞用にと用意した赤いし袋が、まさか役に立たなくなるとは夢にも思いませんでしたが、先生がいっしょにやらないうち、私たちが仕事の先行のことを考えると、かけがいのない精神的バック・ボーンを失った悲しみが、心からこみあげてくるのを禁じ得ません。

讀んで先生のご冥福をお祈り申しあげます。

(北海道生活環境部自然保護課)

## 「北の山」の人

今村朋信

昭和二十五年の九月、東京の神田の古本屋で「北の山」という本を見つけた。著者は伊藤秀五郎。そのころの私は、その本が、日本の山岳古典図書に数えられる名著であるとは知らなかった。

終戦後の数年、私は呆けたように過ごしていた。せめてもの救いは、子供のころ駆け回った山を歩き、遙かな頂を求めて旅立つことであった。ごしよいもとかぼちやを風呂敷に包み、岩塩をポケットにし、のびせての登山だからいたしことではできなかったが、今日のにいえば、誕生の原点に帰って生き直す方向を掴もうとしていたとでもいえようか。

帰りの汽車は台風で二晩も立往生させられたが、私は、「北の山」をむさぼるように読み返して倦むことを知らなかった。登山とは何か――、いまでも多くの議論が重ねられているが、私は、この「北の山」一冊を私のバイブルとしてそのこの登山を重ねてきた。「北海道の山(のち北海道の山と旅と改題)」や、現在発行されている「北の山脈」という地元山の岳雑誌の編集にたずさわってきたのも、

その影響によるところが大きい。

ある機会に、先生の講演を聴いた。昭和初期の山案内人についてであったが、途中から当時の自作の詩と背景の山岳と登山について話された。熱のこもったその語り口に、私は深く感動した。この話を登山するたくさんの人に聴かせたい。「北の山」の人が現存し、いままも青年の意気を抱いておられる素晴らしい。じかに接しさせたいところから願った。ぶしつけな私のことばに、先生はこやかにうなずかれた。

四十九年の秋も深いある日、お約束を果たしてただける喜びを伝えようと、札幌静修短大の学長室へ電話をかけた。出られた先生は、コウトウガンで入院していたこと、退院後の経過が思わしくないうこと、講義の途中で声が出なくなることのあること、みなさんとお会いしたいが受けられないというのであった。

人ごとのようにたんたんと話されるのであったが、たしかに声は傷んでおられた。汗ばんだ掌を水で流しながら、耳の奥に消えぬ声を反すうしていた。

ふたたびその声さえもうかがうことのできなくなった昨年の秋、実にごといねいなお手紙を添えて、お願いしてあった詩稿二編をいただいた。一編は「上河内のウエストン」で「北の山脈(二十号)」に使わせていただいた。他の一編は三節八行の短詩「原生花園」で、オオワシと子狐の生死の一瞬のあとの、のどかな風景を詩ったものであった。

子狐への愛情を抱きながら、先生は、一生をオオワシのように飛び切った人ではなかったのか。その羽音を耳にした者にとって、今朝の深閑とした、空の青さは堪えがたい。(札幌データ電信施設所統制試験課)

秀さんを偲ぶ

佐々保雄

秀さんが逝くなった。再度の入院に、そのことあるを懼れていたが、早くもその日が来てしまった。私達は敬愛する先輩に、もはや会い得ぬ悲しみに打たれて

いる。秀さんと私が最初に会ったのは昭和の初め、「山とスキー」の編集所であった。たろうか、あるいは十勝での合宿だったかも知れない。秀さんは大学生、私はまだ高校生だった。前者ならば山岳部員の梁山泊だった家で、いまの知事公邸の北東隅、以前ドーデーさんと言う老婦人宣教師の住いだった。そのとき何を語り合

## 草原の生きものたち

伊藤 秀五郎

風が光る  
風の中に草原の花々と  
動物たちは生きてゐる  
明るく  
楽しく

草原の季節の風の  
ときに激しく

ささやきこそわが命  
その光こそわが心  
生きものたちはさういって  
音もなくオホーツクの彼方に沈む  
夕陽のなかに

一日の終熄を迎へる  
何事もなかったかのように  
草原を吹く風は明るく  
草原を渉る風は冷い

## 後記

昭和五十年十二月二十七日、小川君

を通じ本書を著者から贈られた日、これを讀みながら、ふと「風光る」というテーマが浮かび、その夜中、この詩を作る。一冊の本を讀んでその著者のために詩を作ったのは、これが最初である。(札幌医大耳鼻科病室で)

〔註〕本書とは竹田津実著「キタキツネ(北辺の原野を駆ける)」平凡社

故人の最後の詩なので、よしあしはともかく御高覧に供します。(伊藤花子)

ったかは忘れたが、爾来、スキー合宿以外一緒に山行をもにする折りも得ず、着かず離れずの間柄であったけれど、会うと親しく話し合え、兄事して、その都度教わるころが多かった。

秀さんは、いろんな面を持った多才の人であった。教育に使命を感じて、身を凝らした時期もあったし、晩年も学長として終られた。しかし生涯を通じて、自然を愛し、それへの傾倒は変らなかつた。その現われとして、生物学者の道を歩んだし、端的には山登りに熱情を抱き、北大山岳部の創設者となつた。

日本山岳会名誉会員に推された昨年暮



## 陳情書、要望書

### 意見書、回答文書

はすでに病床にあつたが、「北の山」(これは最近出版された「日本山岳名著複製全集」にも加えられ、すでに古典としての地位を占めている)などを通じて若い登山者を育くんだ功績は大きい。登山家としては、激しい山登りよりは、自然観察家、山を通じての求道者であつたと言えようか。

その豊かな文才は流麗朗すべき山行記として現われ、人を山に誘ひ、また鋭い感受性は自然と反応し、吟ずべき詩となつて、人の心を自然に導いた。「近頃、湿原に凝つてゐるんだ」と近年よく言い、自然保護のリーダーとして自

然への愛情を惜しみなく注がれた。しかし、なんでも反対と言つた自然保護者でなかつたことはもちろんだつた。

この一、二年、病床にあつて、折りにふれ、一木一草を唱ひ上げ、その繊細な詩情に、澄みきつた自然への愛情を見るのであつた。

あれだけの才能を学問に生かせばと惜しがつた先輩もいたが、登山家として、教育家として、自然愛護者として、多くの人々を惹きつけ、影響を与へ得た点で、秀さんはやはりあの秀さんでよかつたのだと私はいま思つてゐる。

(日本山岳会々員)

で施設を設けられたものであります。早急に施設を撤去し、特別保護地区にふさわしい修景計画を立て、復元をおこなつて自然との信義を全うせられることを要望するものであります。

(資料添付 前回要望書掲載の会報) 写提出先

- 林野庁長官
- 札幌管区長官
- 日本自然保護協会
- 全国自然保護連合
- 札幌市長
- 千歳市長
- 日本オリンピック委員会

自然を破壊する都市計画道路の建設に反対する要望書の提出について

HNC S 第二二五号

昭和五十一年二月二十日

札幌市長 板垣武四郎

札幌市議会議長 松宮利市殿

北海道自然保護協会

会長 石川 俊夫

当協会では、一九七四年七月三十一日付貴職あて要望書のなかで、円山原始林にかかる都市計画道路の建設を再検討くださるよう訴えました。しかし、市当局から示された修正案は従来の六車線のうち両側二車線を暫定的に緑地帯とするというもので依然として円山の山裾を奥行一三メートル、高さ七メートルにわたつて削り取る計画を変えていません。

円山原始林の重要性からいって、この地域の伐採、地形変更は認めることができません。重ねて計画の変更を要望いたします。

また、同じく都市計画道路、道々「羊ヶ丘通」は羊ヶ丘風致地区の中心部を幅三二メートル長さ二キロにわたつて横断し風致地区としての価値を著しく損なうばかりか、附近の住宅環境と教育環境を破壊するおそれがあります。

市議会では現在、この道路の早期建設をめぐつて審査継続中ですが、当協会としては都市内の重要な緑地帯を破壊する自動車道路の建設には反対いたします。

将来の都市交通体系を検討することが先決で、安易な道路建設によって自然を破壊しないように要望いたします。

## 恵庭岳南西斜面におけるオリニック施設についての要望書

HNC S 第二二三号一七

昭和五十一年二月二十日

環境庁長官 小沢辰男殿

北海道自然保護協会

会長 石川 俊夫

本協会は、第十回オリニック冬季大会に際して設けられた恵庭岳南西面の施設について、競技終了後一切撤去するこ

# 環境保全に関する調査研究機関設置の要望書

H N C S 第二二二二号

昭和五十一年二月二十日

北海道知事 堂垣内尚弘 殿

北海道自然保護協会

会長 石川 俊夫

自然保護、環境保全を顧慮しない自然の利用、開発行為は許されるべきではありませんが、複雑精妙な構造機能をもつ自然環境の調査研究は、必要に迫られて行われるのではなく、平素から行われるべきであります。このことに関して、たとえば特定開発事業については、それがもたらす影響を予測、評価するための調査（環境アセスメント）が緊急の課題になっており、条例化が検討されていることはよるこばしいことでもあります。

北海道の自然保護、環境保全をより充実させていく上で更にこの傾向が強まるのは望ましいことではありますが、実際には、種々の自然環境調査の実施に当る機関、人材の確保に対する配慮についてはなお欠けることが多いものと思われまふ。ことに現地調査を基本とする自然環境の調査は様々な分野の調査者が関与する上に、季節による制約も加わるため多数の調査者の確保、養成が急務となっております。

これらの面の保証が得られない限り、いかに完璧な条例、制度がもうけられても今後、急速に増大する調査の実施が危ぶまれると申すべきでありまふしう。

現在、この分野における道の既存調査研究機関の体制は残念なことになりまふて不十分で、大学あるいは民間への委託によつて辛うじてその機能を補完している状態にあります。今や環境アセスメントに関する条例化を控え、環境保全、自然保護のセンターとしての役割を担った独自の調査研究機関が設置されること、北海道の自然を保護、育成していく上で不可欠と考えまふ。

事態の緊急さに鑑み、動物、植物、地質関係の諸部門はもとより、関連領域を糾合した調査研究機関の設置を強く要望するものであります。

## 真駒内緑ヶ丘保健保安林内の連絡道路建設に関する回答書

札幌市民第五十一号

昭和五十一年二月二十五日

北海道自然保護協会

会長 石川 俊夫 殿

札幌市長 板垣 武 四

日ごろ市政に対しご協力をいただき感謝いたします。

さて、さきにお申出のありました真駒内緑ヶ丘保健保安林内の連絡道路建設に関するご意見につきまして、次のとおりお答えいたします。

今後とも市政に対するご理解とご協力をお願いいたします。

### 記

真駒内緑ヶ丘保健保安林内における連絡道路の建設につきましては、昨年八月

初旬、付近住民の代表者から同様の主旨で二通の陳情書が札幌市議会議長あて提出されました。

建設委員会では、住民の要望と土砂運搬車両等の交通量に関する調査資料等を十分に精査するとともに、慎重を期すために継続審議をおこなった結果、これらの陳情は昭和五十年十月三十日、内容を一部修正のうえ同委員会において採択されました。

また、この連絡道路の建設予定周辺は昭和四十五年十月に道が保健保安林として指定する前の昭和四十年七月には、市が都市計画道路をつくるために計画決定をしておりますし、昭和四十五年七月には市街化区域としての指定を受けております。

しかし、従来の都市計画決定どおりに連絡道路を建設することは、緑地の保存と道路構造の技術的な問題もため好ましくないかと判断いたしました。そこで、この問題を解決するために十分調査検討を加えた結果、当初計画していた位置より東側によせて連絡道路を建設することにしたものであります。

さらに連絡道路が保健保安林内の一部を通過するといえ、その面積は約二、六〇〇㎡であり、用地の大部分は土取場の跡地や笹地でありまふので、道路建設により保健保安林の自然が著しく損害を受けることになるとは思われまふせん。

そのうえ、工事の実施にあたりまふことは、将来のために緑化を優先させることを目的として、法面にはブロック工法等

の施工をおこなわず、道路の両側に植樹をおこなうとともに整地をすることにしたいと考えております。

なお、この沿線には教職員のアパートが棟ありますが、連絡道路の完成により土砂運搬車両等が現道（真駒内養護学校一号线）から遠ざかり、騒音等も幾分解消されると思ひます。

さらに、石山西岡線沿線や澄川地区の住民の皆さんも車の騒音等から逃がれることができるようになると思ひます。

また、貴協会からご指摘をいただきましたとおり、土砂、碎石の採取等について全市的な計画をたてるが必要であることは十分に承知しておりますので、長期総合計画を策定する中でこの問題の解決策を検討してまいりたいと思ひております。

最後に、この連絡道路の建設は、この地域に居住している市民を交通騒音等から守るためにも早急に実現しなければならぬものと考えておりますし、市議会においても同様の考え方にたち、本件の陳情が採択されたものと存じます。

## 都市問題特別委員会の発足と委員の公募について

前号の「活動状況」の欄にも書いてあるとおり、昭和五十年十二月十日に開かれた第六十三回理事會において都市問題特別委員会の設置が決まり、これを受けて開かれた十二月二十二日の常任理事會で細部の決定をみた。

従来、自然保護の対象は、とかく自然

の残された比較的遠隔地にかたよっていきなりある。しかし急激な都市の膨張に伴って、都市内部およびその近郊における種々の自然破壊が提起されているにもかかわらず有効な対応を示せなかつたため、熱心な会員諸氏から持ち込まれたいろいろな問題へのとり組みが甘かつたことは否定できない。

前号で市川正良さんがとりあげている真駒内保健保安林の一部指定解除の問題はその一例にすぎず、札幌市内の道路問題だけを例にとっても、月寒、円山、大麻、北星大学付近などと、目白押しの感がある。そのすべてに本協会がかかわりあうことは物理的に不可能であるが、自然保護の問題に触れる限り、常に注視を怠らず、機会をとらえて問題にしていこう方針で臨みたい。つまり、自然保護が決して自分達の日常生活と無縁でないことを原点にすえて、われわれの周囲の環境を見直したいと考えている。

それには一人でも多い会員が、この特別委員会に参加して下さるよう訴えたい。当面は札幌およびその近郊の会員を核に運営していきたいと考えているが、道内の各都市に住む会員にも委員をお願いできたら、とも考えている。もちろん都市問題といっても都市の規模は問題ではないし、関心のある方であれば居住地は問わない。

以上の趣旨をご理解のうえ、一人でも多い参加を期待する次第。また、ご意見なども聞かせていただけたらと考えている。なお委員長は八木健三(副会長)、幹

事は小川 巖(常任理事)と決まった。  
・第三回北海道自然保護シンポジウム開かれる。

三月六、七日、札幌のクリスチャンセンターで北海道自然保護団体連盟主催のシンポジウムがひらかれ、協会からは石川会長のほか、高畑滋、小川 巖、木村悦子の各氏が参加した。

また、大会行事の一つである全体討論学習会において、石川会長が「環境アセスメントについて」、また本協会職員である横 浩三氏が「入山料問題について」と題するレクチャーを勤め、好評を博した。この内容については、次の会報で詳しくお知らせする予定でいる。

#### ・刊行物の二案内

「北海道の森林植物園鑑」(二冊一組 樹木編、草花編)が、北海道国土緑化推進委員会(札幌市中央区北四条西五丁目 林業会館内)から発行されることになりました。アート紙、カラー印刷、上製本箱入りで一組五千円です。限定出版であるため、すぐに品切れになることが予想されます。お申し込みは、各支庁管内の国土緑化推進委員会(支部)または、各支庁林務課へ。なお、発行は五月一日の予定です。

「全国自然保護通信」(全国自然保護連合発行)以前は「JUNIC」という名前でしたが、十号から現在の名称に改題したものです。協会で十部程度一括購入しておりますので、ご希望の方に一部につき二百五十円でお頒けします。十号、十一号、十二号に残部が若干あります。

定期購読を希望する場合は、年間費用として千九百五十円を左記宛お送りください。

〒530 大阪市北区薬村町五十八  
サクラビル新館三〇八号

JUNIC編集部

郵便振替 大阪四二二二六

全国の自然保護団体の活動状況が随所に盛りこまれており、大変参考になると思えます。

「国土と人権」(西山卯三、山崎不二夫 山本荘毅編、時事通信社、二千五百円)本の題名だけではピンとこないかも知れないが、サブタイトル「国土問題の総合的分析」が示すように、広範な内容が盛りこまれている。本協会の八木健三副会長も、十六人の分担執筆者の一人として「国土開発と自然保護」の項を担当しておられる。

・お知らせ  
・六月初旬の環境週間には間に合わないのが残念ですが、六月下旬から七月上旬の土曜日の午後協会主催の「自然保護講座・第一期」を開講する準備が着々と進んでいます。講座の内容、応募方法などについては、会報第二十二号で発表いたします。ご期待を。

・北海道の自然を平易に解説した小冊子を発行する予定も企画の段階から大きく前進し、夏までには第一冊目が刊行できそうです。年間数冊ずつの刊行で息長くつづけることを目標にしています。「札幌の野鳥」「藻岩山」「防風林」「川の魚たち」など、題材はたくさんあります。

中学生程度を対象にしたこのシリーズに盛りこみたいテーマなどありましたら、ご一報下さい。

・本格的な春のシーズンに合わせて「自然に親しむ会」も何度が開催します。毎回の例ですと、むしろ会員外の方が活発に参加して下さるよう見受けられます。どうかお気軽に参加して下さい。

・ご存じのとおり一月二十五日から郵便料金が大幅に値上がりし、これまでのように、協会主催の催し物のたびに案内状を送ることが困難になりました。したがって、今後は会誌・会報を利用してまとめてお知らせすることにします。どうかお見逃しのないようご注意ください。

#### □編集後記□

この号を準備中のところに伊藤先生が亡くなられたため、急遽「追悼号」とすることになった。「くちなし」の詩は、伊藤先生から辻井先生への便りに添えられたものである。筆跡をここに記録し、永く故人を偲ぶよすがともなればと、版を起こしてみた。詩とともに、ご鑑賞をいただければ幸いです。(山口 透)

昭和五十一年三月三十日発行

札幌市中央区北二条西八丁目  
北海道大学植物園内

発行所 北海道自然保護協会

電話(三三)〇〇六六番

発行人 石川 俊 夫

印刷 札幌印刷株式会社